

## インドネシアの学生との芸術文化交流

長野士郎元岡山県知事は、1944年に海軍司政官として、インドネシア東部のスラウエシ島に赴任されました。それから70年後の昨年4月、同島最大の都市マカッサルにあるハサヌディン大学との間で、岡山県立大学は学術交流協定を締結しました。これまでに何度も教員の相互訪問を行い、看護、栄養、デザイン等の分野で交流を深めてきました。

インドネシアは、人口約2億4千万、島が1万以上もあり、東西の距離が5千キロ超と、広大かつ多民族の国家であることから、文化や生活の様子も地域毎に実に多彩です。同大学のあるスラウエシ島南部は、エビの養殖などの漁業、米・ココヤシ・カカオ豆等の農業などが盛んですが、台風や地震、火山噴火等の自然災害の心配が無い、とても暮らしやすい地域であり、近年の発展はめざましい、と伺いました。

同大学には、学生の民俗音楽舞踊グループがあり、その水準は非常に高く、数々の海外公演の経験もあることから、11月の県立大学の大学祭に学生20名をお招きして、彼らの力強い歌声と華やかな舞踊を披露してもらうことになりました。



一行の来学直後に行った子ども学専攻学生とのワークショップでは、それぞれの国の歌を紹介し合った後、折り紙を一緒に楽しみ、最後にインドネシアの民俗舞踊を教えてもらいました。英語が得意でなかったり、国際交流にあまり馴染みの無い学生も含めて、全員一体となって踊りの輪を作り、大きな盛り上がりの中で一連の行事が始まりました。

キャンパス内での公演は4回ありましたが、スラウエシ島に限らず、バリ島などインドネシア各地の多彩な歌と踊りが紹介されました。「プロ並みのハイレベルな演技で驚いた。」「インドネシアの情景が見えるようで、現地に行った気持ちになった。」「きらびやかな民俗衣装と学生たちの笑顔が素晴らしい。」「若者がインドネシアの芸術文化を大切に思い、しっかりと受け継いでいるのがよく分かった。」など、観客アンケートの結果から、音楽と舞踊を大変楽しんでいただき、インドネシアに対する理解を深めていただいた様子がよく分かりました。



また、総社市内の小中学生と、音楽や日本の遊び・文化（コマ回し、紙ふうせん、習字など）等を通じた交流も2回行いました。先生方からは、「どの児童も、外国の人と直接話したり、一緒に遊んだりできて、本当に喜んでいた。」「ほとんどの生徒が、豊富な練習量に裏打ちされた生の歌声の迫力に感動して、声も出なかった。」などの感想をお聞きしました。一方インドネシアの学生からは、「教室で全員と一緒に給食を食べるのには驚いた。」「墨で字を書いたり、抹茶を点てたりするのは初めてだったが、思った以上に楽しかった。」等の発言があり、地域における国際交流の促進にも、一役買うことができました。

今回の滞在のハイライトのひとつが、ホームステイです。総社市の皆様を中心に、原則2名の学生が1家庭でお世話になりました。滞在は4泊でしたが、食事を共にしたり、買い物と一緒にいたり、言葉が違う中で何とか工夫して意思疎通に努めたりしていただく内に、日に日にお互いが打ち解けていく様子が、周りからも容易に感じられました。最終日の早朝にバスで出発する際には、どの家庭も涙涙でなかなか離れられず、早期の再会を約束しながらの辛いお別れとなったようです。

今回のインドネシアの学生の受入では、総社市を中心に多くの県民の皆様方と、本当に中身の濃い身近な交流ができました。直接会って話したり、同じ体験をしたりすることが、相互の理解を深めて心を通じさせる早道になります。今後とも、このような機会をたくさん作っていきたいと考えています。